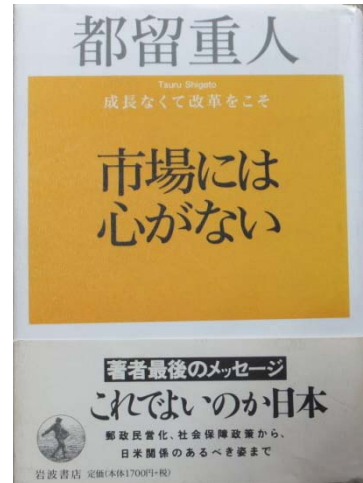


『市場には心がない』再読

「成長なくて改革をこそ」という副題のついた本書は、2006年に都留重人先生が岩波書店から出版された。「まえがき」から紹介していこう。

ともかく日常の時事問題に関心を寄せて、その都度ざっくばらんの所感を書きとどめるというのは、私の何十年来の習慣だった。それを、ほぼ5年ごとにまとめて小著の形で公刊するのを、私は自分なりに「5年もの」と呼んできており、約5年前のは『21世紀 日本への期待』（岩波書店、2001年）であった。--- もう私も93歳になっていることだし、こうした習慣をいつまで続けられるか確信をもてないので、今回、おそらくは最後になるであろう「5年もの」として「孫の世代と内外世情を語る」という趣旨でまとめあげたのが本書である。



『週刊読書人』2006年3月24日号で山口昭男岩波書店社長が都留先生の「追悼文」を書かれている。この最後の著作の最終稿をいただいたのが2005年12月7日、ゲラにしてお届けしたのが28日、年明け1月10日に著者校正のゲラを戻していただいたのだが、そのときは「正月はゲラを読むことに追われて入院もできなかった。12日から病院に入るから」と憎まれ口をたたかれていた。再校ゲラが20日に届くと、先生は病室で何回もペンを持たれ、手を入れようとされたのだが、それはかなわなかった。そして2月6日、先生が亡くなった翌日、この本は校了となった。最後の作品を手にとっただけで見ていただけなかったことは、本当に残念だが、この本を書き上げたときは本当にうれしそうだったという。

本書は第Ⅰ部「小泉政権の政策批判」、第Ⅱ部「技術革新が進む社会的環境の変容」、第Ⅲ部「明るい未来を求めて」から構成されている。第1章「民営化の問題点」はサムエルソンの「市場には心がない」という言葉から始まる。先生の最後の「5年もの」は市場原理主義批判であり、小泉政治の批判の書であり、「改革なくして成長なし」というスローガンは手段と目的をはき違えている、と喝破している(山口氏)。これが「成長なくて改革をこそ」という副題につながっている。

第8章「自然との共生を深める抜本的な環境再編への期待」では、抜本的対策を二つ提案する。イタリアにその例を見ることができるが、戦後に埋め立てた土地を以前の自然体に復元すること、もう一つは日本領土内の米軍基地を撤廃することである。これが実現できれば、少なくとも3世代にわたり日本国内で一番きびしい犠牲と負担に堪えてきた沖縄の人たちの、こみあげる歓喜の光景を、私は想像できる。それこそが、「明るい未来を求め」私たちのための象徴的光景であるだろう。

(2014年10月29日)